

新聞記事に見られる断定保留表現

富 阪 容 子

1. はじめに

思考判断を示す動詞としては、「推測する、予想する、予測する、推察する、判断する」等の漢語動詞があり、「思う、考える、見る」などの和語動詞がある。それぞれの使用頻度は話し言葉、書き言葉によって変化するし、同じ書き言葉の中でも、学術論文、小説、ドキュメンタリー、新聞記事などのジャンルによって当然変わってくる。そこで、新聞記事の中でどの動詞が最も頻繁に使われているかを調査するために、まず朝日新聞のテキストデータを資料として¹⁾その使用の分布を観察してみることにする。特に「思う、考える、見る」の三動詞に焦点を絞って考えてみたい。

森山（1992）では文末思考動詞「思う」を主観的用法と客観的用法の二つに分類している。前者の「思う」は話者の意思を表明するために語用論的条件から選択されたものであり、後者の「思う」は不確実表示機能を示すものであると見なされている。前者の「思う」は対人機能を持つものであるから、不特定多数の読者を対象とする新聞記事には表れることがなく、新聞の中で見られるのは不確実表示機能を示すための「思う」に限定されると言える。

『日本語基本動詞用法辞典』（1989）では「考える」の意味内容について「物事について筋道を立てて思ったり、判断したり、予測したりする」と書かれている。佐藤（1997）の調査によると工学系学術論文では「考えられる」が最もよく使用されるという。「考える」が「思う」と違う点は「筋道を立てて」の部分にあると思われる。より知的レベルが進んだ思考と見なすことができるので、論理的な推論に適していると言えるだろう。同書の「見る」の項目では「様子状況から考えて、ある判断を下す」と定義づけられている。「見る」はもともと知覚動詞であるが、「と見る」の形をとると、思考判断を示す動詞となり、新聞記事では「西条署は遭難した可能性もあると見て²⁾搜索を始めた」のように使われる。「見る」の代わりに「考える」を使用することは可能だが、「思う」を使うと不自然である。「西条署員は遭難した可能性もあると思って搜索を始めた」と言うことはできるが、それは一個人の判断であり、組織の一員としての判断ではない。「見る」を使うと、判断主体は個人だけでなく、組織、更には組織を場所化したものになることが多い。新聞記事で使用される「見る」は、その判断が個人的な主観によるものではなく、確かな根拠にもとづいた客観的判断であることを示す目的がある。これら事実認識にかかわる類義動詞の意味内容の違いについて考えていきたいと思う。

2. 新聞記事に見られる判断表現

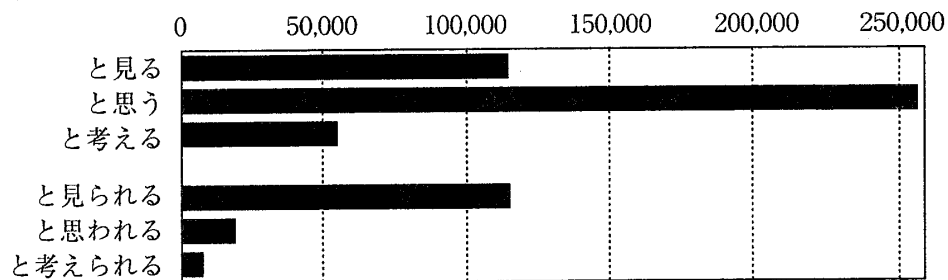
「見る」「思う」「考える」の各動詞が新聞記事の中でどのような頻度で使われているかを調べてみると、表1の結果が得られた³⁾。表1の中では煩雑さを避けるために、「見る、見た、見て、見ます、見ました」等の活用形すべてを含めたものを「と見る」で代表させ、「見ら〜」の形をとるものすべてを「と見られる」で代表させることにしている。「思う」や「考える」に関しても同様である。また、文末表現として使われるものばかりでなく、次のように連体節内で使われるものも含めている。

(1) 米大使館を標的にしたとみられる爆破テロ事件が発生した。(朝)⁴⁾

表1では「見る」「見られる」のように漢字によって表記されているが、実際の記事の中では漢字とひらがなの二種の表記が混在している。知覚動詞「見る」から判断動詞へと移行したために表記に揺れが生じているのであろう。

(2) この硬貨を自動販売機に入れ、釣り銭を盗み取ったものとみられ、多いところでは一カ所で百枚以上の変造硬貨が見つかったという。被害額は約二十万円に上るものと見
られている。(朝)

【表1】



この表を見ると、最も多く使用されているのが「と思う」であり、「と見る」「と考える」がそれに続く。しかし、これら各動詞に対応するラレル形⁵⁾になると、「と見られる」の使用率が一段と高くなり、「と見る」とほぼ同じ使用率を示している。次の記事からもわかるように判断主体を明示する際には「と見る」が使われ、判断主体が明らかでないか又は明らかにする必要がない場合には「と見られる」が用いられる。

(3) 岩田被告らはカード詐欺のマニュアル本を参考に、スポーツ紙で借金を抱えた客にクレジットカード詐欺の手口を指南したとみられる。また金融会社の事務所から、同社の管理部長の肩書のある暴力団幹部の名刺も押収されており、同署は金の一部が暴力団に流れた可能性があるとみてしらべている。(朝)

新聞記事に限定して言えば、「思う系動詞」(と想う／と思われる)と同程度に「見る系動詞」が使用されていると言える。表1には「見える」「思える」は含まれていない。「見える」の使用⁶⁾は極端に少なく、使われるのは投書欄などの名前入り記事に限られている。次の文中の「見られる」を「見える」に置き換えることはできないだろう。

(4) 会議では、アジアの経済危機と日本の経済対策をめぐる意見交換が中心になると見ら

れるが、それに加えて、同月上旬に予定されているクリントン大統領のロシア訪問のころになると見られる、江沢民・中国国家首席の訪日などを踏まえ、中国やロシアとの関係についても話し合うものと見られる。(朝)

事件や出来事に関する真実を報道すべき新聞記事には個人的な視点や主観を含めることが許されない。ラレル形は客観的根拠に基づいた状況判断であることを示すのに対して、「見える」や「思える」はその判断主体が個人にあることを示す。

「と思う」「と考える」はいずれも何の断りもなければ、その判断主体は話者である。特にそのことを強調したい時に限り、「私は～」という主語を加えることになる。「と思われる」の場合にも、何の断りもなければ「私にとって～と思われる」という意味となり、特に強調する必要があれば「私には～と思われる」という明確な形で表現する。同様に、「私には～と考えられる」「私には～と見える」「私には～と思える」という形が可能であるが、「私には～と見られる」という形は不自然である。その点からすると、「と見られる」はもともと判断主体を明かさず、類推される内容に焦点を当てるという独自の機能を備えていることがわかる。新聞記事の中でも、特にニュース報道において「私は」という観点は不必要であるから「と見られる」という判断動詞がしばしば選択されることになるのであろう。

一般的な思考動詞としては「と思う」が第一位に挙げられるが、新聞記事では「と見られる」が常用されること及びその理由の一端が明らかになったと思う。次には、「と見られる」に代表される判断動詞のラレル形を「自発」と見なすべきかどうかについて考えてみたい。

3. 判断動詞のラレル形は自発か

「不確実である」ことに対して、話者がどう考えるかを積極的に表現する(個人的な意見を個人のものとして提示する)時には「思う」が多用され、「不確実である」ことを前提にしながらも、根拠に基づけば客観的にはどう判断することが可能で、どう判断することが自然であるかを示す時には「と思われる」が用いられる。では、判断動詞のラレル形は可能態と見なすことができるのか、それとも自発態と見なすことができるのだろうか。ある状況についての解釈が自然発生的であり、理にかなっており、疑問の余地が少ないことを示しているので、意味上では可能の側面も自発の側面も備えているように思う。また、その判断内容は単に話者(書き手)の判断であるのみならず、聞き手(読者)や第三者の視点からも同様の判断がなされるであろうという意味合いを含んでいる点からすると、受動態の特徴も備えている。ただし、日本語の典型的な受身文とは明らかに性格を異にしている。「見る」「思う」「考える」の各動詞によっても、そのラレル形の解釈には若干の違いが生じるのではないと思われる。

冒頭でも触れたように、対人機能を持つ「思う」と不確実表示機能を持つ「思う」とがあるが、それぞれのラレル形は意味上の違いが明確である。後者の「思う」は英訳されると次のように Passive Voice になることが多い。

(5) これまで通りに政権を維持するのは極めて困難と思われる。(朝)

It is believed that it will be extremely difficult to maintain power as he has in the

past.

上の例のほかにも、It is generally accepted; It is understood to be などのように訳される。また、「予想される」「推測される」などの漢語動詞の場合も Passive で英訳されるのが普通である。しかし、対人機能を持つ「思う」のラレル形はそうはならない。語用論的意図からラレル形が選択されたに過ぎないので、「思う」と「思われる」との違いは英語では表現しにくい。「子供時代のことがなつかしく思われる」のような感情表現は自発態と見なしてもよいだろうが、これは判断動詞の「思う」とは区別されるべきものである。

尾上 (1996) では、ラレル形述語文を「事態を個体の運動として語らず、事態全体の発生、生起として語る文」と規定している。判断動詞のラレル形述語文に関しても、この把握の仕方は要を得ており、「そのコトが認識次元に生起する」ことを語る文と見なすことができるだろう。眼鏡をかけたら風景全体が目に入ったかの如く、ある状況が認識領域に生じたことを示す。尾上では、現代語の自発文のうちでラレル形で語られるものを次の三種に分類している。

- (6) a. 感覚次元におけるモノの存在 (見られる, 聞かれる等)
- b. 認識次元におけるモノの存在 (思われる, 思い出される等)
- c. 感情次元におけるモノの存在 (なつかしまれる, 悔やまれる等)

「思われる」は(6b)に位置づけられている。「可能」か「自発」かの判断基準は行為の意図の有無にあるという。意図した結果、成立したりしなかったりする状況は「可能」「不可能」で表現され、意図の存在しない条件下で成立した状況は「自発」であるとされる。判断動詞としての「見える」「思える」は意図せずして対象の方から認識可能領域に飛び込んでくることによって成立する事態であるから「自発」と見なすことができるだろう。しかし、その他の動詞の意図性有無の判断は容易ではない。「ちょっと考えてみよう」「考えるのをやめる」のように、「考える」は話者の意図によって制御しうる行為である。「予測する」「推定する」等の漢語動詞も同様で、「予測しうる」「推定しうる」のように可能の意味でラレル形が使用される可能性がある。一方、「見る」「思う」の場合はどうだろうか。知覚動詞としての「見る」なら、「視線を向ける」という意図的行為と見なすことができるが、判断動詞としての「見る」は意図的行為と見なすことができるだろうか。「私は彼女の事を思っている」のような「思う」なら意図が感じられるかもしれないが、「ちょっと思って下さい」という文が成立しないように、基本的には意図せずして生じた結果を表す動詞ではないだろうか。意図性の有無によって「可能」か「自発」かを判断するとすれば、これら一連の判断動詞のすべてに共通した理解が得られないことになってしまう。そこで、尾上 (1996) で取り上げられている「実現可能」という把握の方法をとることにしよう。「実現可能」とは「やってみたらできた」というような意味を表し、現実界で既成立の事態を指すという点で、普通の「可能」とは性格を異にしている。判断動詞のラレル形は、「思われる」「見られる」のように非過去形を示しているが、「そう判断したし、今もそう判断されている」という意味だから、既成立のアスペクトを示している。ある事態が生じたことを語っているという点から「実現」用法と見なすなら「見える」「思える」なども含めた判断動詞全体の性格を分析する上で有効である。典型的自発とされる「泣

けた」が自分の意図と関係なく出現した事態を示すのと同じく、判断動詞のラレル文も発言主体の意図と無関係に（主観的判断ではなく）認識領域に生じた客観的判断であることを示すことにその重要な役割があると言えよう。

4. 「もの」に導かれる判断表現

新聞のニュース報道では、断定を避けるための文末表現として「と見られる」が使われる際、次のように「ものと見られる」の形をとることがしばしばある。

- (7) 台風7号は午後11時ごろ紀伊半島に上陸したものと見られます。
 明朝には日本海に達するものと予想されています。
- (8) a. 犯人は国外へ逃走したものと見られる。 (動詞の過去形+もの)
 b. 犯人は銃を持っているものと見られる。 (動詞の非過去形+もの)
 c. 犯人はこのあたりの地理に詳しいものと見られる。 (形容詞+もの)
 d. 単独犯による犯行と見られる。

(8abc)は「ものと見られる」「と見られる」のどちらも使用可能であるが、(8d)のように名詞に続く場合には「単独犯による犯行であるものと見られる」と言うことも可能ではあるが、上のように「もの」を使わない方が普通である。(8a)のように動詞の過去形に続く場合は、既に発生した事態の背後関係を推測する目的で使用され、(8b)のように動詞の非過去形に続く場合は今現在発生中の状況の解明、或いは今後発生する事態の予測として使用される。前項には変化を表す動詞成分（なる、増える、値上げする、進んでいく、達する、等）が来ることが多い。

次の表2は「もの」に導かれる判断表現の新聞記事における使用分布である。表1と同様に、「ものと見る」は「見る」の活用形のすべてを含み、「ものと見られる」は「見られる」の活用形のすべてを含むものとみなす。「ものと思う」「もの考える」等も同様である。

【表2】

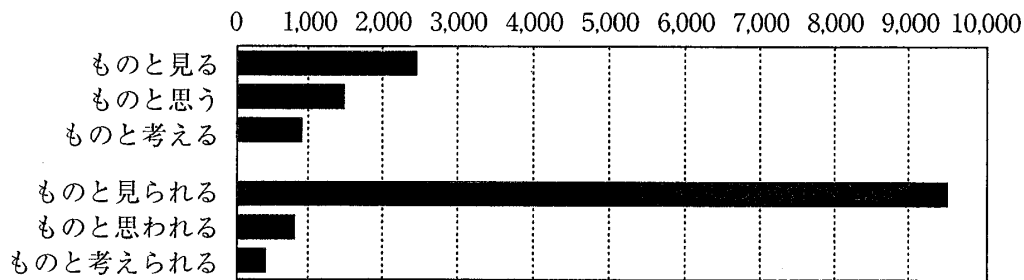


表2では次のような「もの」を含む文はできるだけ排除するようにした。

- (9) a. それは重要なものと見られる。 (な形容詞+もの)
 b. それは健康にいいものと思われる。 (い形容詞+もの)
 c. それは江戸時代のものと考えられる。 (名詞+の+もの)
 d. それは親が買ってやったものと思われる。 (動詞+もの)

(9a)は(9a²)のように、「だ」を挿入することが可能だが、(9a³)のように「もの」を削除する

ことはできない。「もの」は引用節内文の必須要素になっているからである。

- (9) a². それは重要なものだと見られる。 (＋だ) 可
 *a³. それは重要なと見られる。 (－もの) 不可 (*は非文を表す)

(9bcd)についても同様である。しかし、次の例では三種の文が可能となる。

- (10) a¹. できるだけ早く解決したいものと思う。
 a². できるだけ早く解決したいものだと思う。 (＋だ) 可
 a³. できるだけ早く解決したいと思う。 (－もの) 可

(10a¹)の「もの」は引用節内文の必須要素ではないが、「～たい」との関係が密接であり(7)や(8)の「もの」とは働きを異にするものと見なすべきであろう。

次の(11)(12)はある事情の背景、状況、性格などを分析、及び解説する文である。解説を加える対象となる状況や事情は言語化されて文中に表れる場合もあれば表れない場合もある。

- (11) ハレーのチリの中の物質のスペクトルを分析したところ、炭素結合した有機物の存在が確認された。太陽系内の星間物質をハレーがとり込んだものと見られる。(朝)

- (12) 判決の考え方には最近の憲法学界の潮流などが反映しているものと見られる。(朝)

(8)の文中の「もの」と(11)や(12)の文中の「もの」とを同一のものとして扱うべきかどうかの判断は難しい。(10)と同様に、(11)や(12)でも「ものだと見られる」と言うことができるし「もの」なし文にもできる。しかし、「もの」なし文より「もの」を含む文とする方が文末表現として落ちついた感じがすることは否定できない。同様の例を挙げてみよう。

- (13) a. 国会で所信表明演説を行なった。今後の方針を明らかにしたものである。
 b. 国会で所信表明演説を行なった。今後の方針を明らかにしたものと思われる。

(13a)は状況判断を断定的に述べる文であり、(13b)は断定を避けた判断保留文であるが、その事態に対する話者の態度を別にすれば、両方の文で用いられている「もの」は同質である。(13a)の「ものである」は、状況説明の働きを持つ「のである」と類似した面を持っている。「のである」には広範囲な用法があるのに対し、「ものである」はある状況に対してどんな解釈を下すかを表明するという専用機能を持っている。また、「のである」と比べると「ものである」の方が解説、解明、解釈の方法が分析的であり論理的である。「のである」は「どうしたのですか」の形で事情説明を求める際にも使われるが、「ものである」はそのような形では用いられない。「どうしたんですか」「さいふをなくしたんです」という問答に見られるように、話し手と聞き手とに共有されている状況(相手の慌てている様子)が会話の糸口となって「んです」が使用される。それに対して、「ものである」の場合は、このような対話の双方に共有される状況が存在するとは限らず、話者が解説を加えようとする状況や情景は客観的に判断されるべき対象物である。電車の到着が遅れているという状況下において、どういう推測がなされるだろうか。次のような二種の文末表現が可能となるだろう。

- (14) a. 何か事故があったのだと思う。
 b. 何か事故があったものと思う。

刻々と変化する事態に直面した際、その時点での判断を示すために、(14b)のような「もの」

文が使われる。断定しがたい状況であることが前提となっていながら発話時において何らかの結論を下すべき必要性に迫られると「もの」文が選択され、「遭難者は死んだもの」と思って、いったん搜索を打ち切った」のような文となる。「彼は来ないと思う」というのは、その時点での判断に過ぎないが、「彼は来ないものと思う」はその段階で見切りをつけた結論としての状況判断であると言える。どんな事態に対して見切り発車的な判断を下さなければならないかという条件を明らかにすることは容易ではない。多くの使用例にあたって分析する必要があるだろう。新聞報道に関していう限りでは、(7)(8)のように読者にとって緊急性が高く、関心度の高い報道、また逆に(11)(12)のように、ある程度の距離感を置いて客観的に行われる状況分析(社説や論説)の中で、事態の背後関係や将来の見通し、見込みなどを伝えることを目的として使用されることが多い。「もの」を含んだ文にするかどうかの判断基準は極めて微妙であり、ここでは一般的な傾向を述べるにとどめておきたい。

5. 「こと」に導かれる判断表現

次の表3は「こと」に導かれる判断表現の新聞記事における分布である。「もの」文と同様引用節内の必須要素としての「こと」を含む文はできるだけ排除するようにしている。

(15) a. 一人きりで生活するのはさびしいことと存じます。

b. 一人きりで生活するのはさびしいことだと存じます。

(15a)は「こと」に導かれた判断表現と見なしうるが、(15b)は「こと」が引用節内の必須要素となっているので、除外すべきであろう。表2と表3との比較から明らかなように、「こと」に導かれる判断表現の使用回数は「もの」文と比べるとはるかに少ない。

【表3】

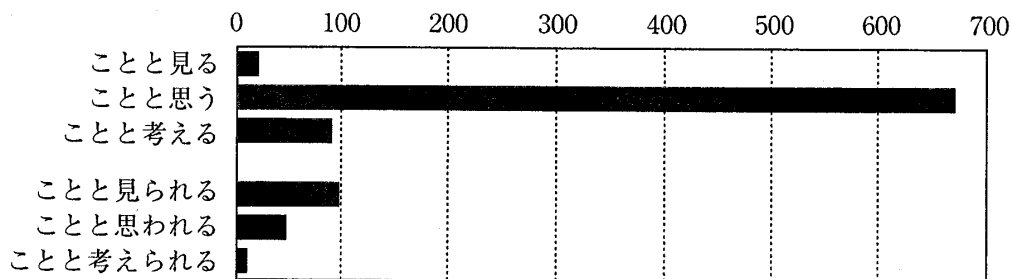


表2の場合、「ものと見られる」が最も使用頻度が高かったが、表3を見ると「ことと思う」がその中核となっており、対応するラレル形は派生的に生じたものに過ぎないことがわかる。「ものと見られる」は新聞記事に重点的に見られる形であるのに対して、「ことと思う」は必ずしも新聞記事に特徴的なものではない。日本語文型辞典(1998)では、「ことと思う」に関して次のような説明がある。

(16) 節に付いて、聞き手の状況を同情やいたわりの気持ちをこめて推測する気持ちを表す。

「さぞ」「さぞかし」「ずいぶん」などの副詞とともに使われることが多い。「……思う」よりあらたまった書きことば的な感じを与える表現で、手紙文に多く用いられる。

ここでも指摘されているように、手紙文でよく使われるのは確かである。新潮文庫100冊の

中で「ことと思う」「ことと思われる」の使用例を調べてみると、「ことと思われる」は0件、「ことと思う」が20件であり、そのうち16件が手紙文で使用されている。

- (17) a. 試験はもう終わったことと思います。御つかれさまでした。(青春の蹉跎)
 b. あなたにこんなお話を**してびっくりなさること**と思いますが。(忍ぶ川)

書き手が自らの立場から、相手(または第三者)の置かれた状況に思いをはせて、ねざらいや同情、共感などの感情をこめて表現するのに使う。相手の置かれた状況はその本人の領域に属する情報であるから、とりたてて伝達する必要性がないにもかかわらず、あえて表現するのはなぜだろうか。その状況描写に重点があるのではなく、感情描写に目的があるからだと思われる。(16)にもあるように「さぞ」「さぞかし」のような聞き手配慮の副詞や「きっと」「必ずや」のような蓋然性の高さを示す副詞と共に用いられる。表3から明らかになるのは、この表現の使用は手紙文に限定されるものではなく、少ないながらも新聞記事の中でも使用されるということである。

- (18) a. 議会が富山市発展のためにすばらしい結論を出すことと思う。(朝)
 b. 国民の重要課題には住民投票を採用し、法的な効力あるものにする方向に持っていく方が国民の政治への関心も高まることと思う。(朝)

(18a)では「すばらしい結論を出す」ことが富山市に与える影響に対する思い入れが含まれており、(18b)では「住民投票を採用し、法的な効力あるものにする方向に持っていく」ことが将来、人々に良い影響を与えるであろうという思い入れが含まれている。つまり、「ことと思う」はその事態に対する話者の態度表明が鮮明であると言える。感情移入は時間的移動や空間的移動も可能であり、次のような問いへの答えとしても「ことと思う」が使用される。

- (19) a. 十年後の日本経済はどうなっているだろうか。
 b. オーストラリアは今ごろどんな気候だろうか。
 c. もし彼が今も生きていたとすれば、どうしているだろうか。

(19a)の場合「現在から十年後へ」と時間的移動がなされ、(19b)では「日本からオーストラリアへ」と空間的移動がなされている。単なる知的関心としての問いなら「と思う」を使って答えればよいが、「十年後の日本に生きる我々」「オーストラリアにいる友人」への感情移入を伴うと、「ことと思う」や「ことだろう(と思う)」を使って答えることになる。また、(19c)のような仮想現実への感情移入もありえる。

次に、「ものと思う」との違いについて考えるために(7)の用例をもう一度見てみよう。

- (7) a¹. 犯人は国外へ逃走したものと見られる。
 b¹. 犯人は銃を持っているものと見られる。
 c¹. 犯人はこのあたりの地理に詳しいものと見られる。

これらの「もの」文を「こと」で置き換えて、「～と思う」を使用すると、次のようになる。

- (7) a². 犯人は国外へ逃走したことと思う。
 b². 犯人は銃を持っていることと思う。
 c². 犯人はこのあたりの地理に詳しいことと思う。

上のように書き換えると「こと」文と「もの」文との意味上の違いが明らかになる。「もの」文は新聞記事でよく見られる文体であり、客観的報道として何の問題もないが、「こと」文はどんな文脈で誰がどんな意図を持って発話した文かということが明らかでない限り、文の適宜を判断することができない。話者（書き手）が何（誰）に対して感情移入したのかが明確になって初めて成立する。たとえば、話者が犯人側の立場に立つ人物で、犯人が無事に逃げおおせることを期待しているとすれば、(7a²)のような発言となるかもしれない。反対に、犯人の銃所有が人質に危険を及ぼす危険性があることを、人質側の立場から心配して発言するなら(7b²)のようになるかもしれない。「もの」文は状況をどう判断するかを伝えることに特色があり、「こと」文は聞き手配慮の表現となりえることに特色がある。

(20) a. 今夜は電話がかかってくるものと思うから、私は早く家に帰ります。

b. 今夜は電話がかかってくることと思うから、早く家に帰ってください

(20a)の場合、「私の家に電話がかかる」ことを予期しているのに対して、(20b)の場合は「相手（或いは第三者）の家に電話がかかる」事態を予測して、相手の立場になってその事態を受け止めようとしている。良い事態の発生を期待しているか、悪い事態を危惧しているかにかかわらず、また誰に対する感情移入であるかに関係なく、影響を受ける側への関心の深さを表すために「こと」文が使用される。「もの」文の場合、認識対象となっている状況は話者の領域内の事柄であるのに対して、「こと」文の場合は認識対象の状況は聞き手（或いは第三者）の領域に属するものであるとすることができるだろう。

6. おわりに

「彼は犯人だ」と断定することはできないが、「彼は犯人だと見られる」と表現することは妥当である。「犯人が車に乗り込んで逃走した」と断定することはできないが、「銀行を襲ったと見られる男が車に乗り込んで逃走した」というのは適切な表現となる。このように、「と見られる」は断定を保留にするために用いられるが、新聞報道で何を断定することが妥当であり、何を断定保留にするべきか、又、断定を保留するためにどんな文末表現が選ばれるかという点は興味深い。

(21) a. 世界人口は来年半ばには60億人に達する。

b. 世界人口は来年半ばには60億人に達しそうだ。

c. 世界人口は来年半ばには60億人に達するだろう。

d. 世界人口は来年半ばには60億人に達すると見られる。

e. 世界人口は来年半ばには60億人に達するらしい。

f. 世界人口は来年半ばには60億人に達するという。(といわれる)

上の各文は、前後の文脈なしではどれを選択することも可能であるが、記者は何らかの基準に基づいて選択を行っており、実際、次のようにさまざまな文末表現が使用されている。

(22) 世界人口は今なお年間8千万人以上という規模で増えつづけており、来年半ばには60億人の大台に達する。(略)年間増加数は今後10年間、この水準を維持するとみられ

る。先進国では50年には8%だった高齢者人口が14%に増加、2050年までには25%になると見込まれている。日本、ドイツ、イタリアでは今後35年間にこの比率が40%に近づくか超えるだろうという。(朝)

(21a)のような断定形をとるか、または(21b)以下のような形をとるかに関する日英の違いについて、浅野(1996)では次のように述べている。

- (23) 英語においては「何らかの情報を伝達する場合、他の意見に対して配慮する必要がなければ、状況の許す限り曖昧な表現を避けること」というのが主なルールとして働くのに対し、日本語では「他者の反対意見や他の可能性が低い場合でも、十分な証拠がないことはいわないこと」というのが主なルールとして働く。

既に述べたように「見られる」や「思われる」に相当する英語がはっきりと表われる場合もあるが、そのような断定保留表現をあえて選択しない方が英語としては適当な場合もしばしばあるということである。

命題内容を確かなものとして「断定」するか、あるいは「断定保留」にするべきか。断定を保留にする際には助動詞を使う方法もあれば動詞を使う方法もある。更には、伝え聞いたこととして示す形式もあるし、状況をどう判断するかを示す形式もある。森山(1989)では、認識的ムードの形式を「狭義判断の形式」⁷⁾「情報把握の形式」「状況把握の形式」に分類している。(21f)は情報把握の形式であるが、(21d)は状況把握の形式の一つであると思なすことが可能であろう。(21e)のような「らしい」は文脈によって情報把握とも状況把握とも解釈できるが、「と見られる」や「と見える」等は状況把握の「らしい」と同様の働きをすると見なすことができる。しかし、言語使用環境によって選ばれる形式が変わる。新聞記事のような不特定多数の人を対象とする公的な場面では「らしい」ではなく「と見られる」の方が適当とされる。また(21d)や(21f)のような動詞述語は文末で使われるばかりでなく、連体節内にも容易に入りうる点が他の助動詞とは異なる点である。

本稿では(21d)のような状況把握の形式が「もの」をとることも「こと」をとることもあるという現象に注目し、「もの」を含む状況把握文と「こと」を含む状況把握文との使用頻度の違いを新聞記事を対象にして調査してきた。これらの使用頻度の把握は、日本語の教育現場における学習項目の提示順序を考える上で有効であり、特に中上級段階のシラバスを考えるにあたって重要な基礎となる。使用頻度の高い項目は当然のことながら、学習段階の早い時期に導入されるべきである。使用頻度が低いからといって重視しなくてもいいということにはならないが、使用頻度はいくつかの判断基準のうちの一つであると考えられる。日本語教育が拡充されてくる中で、初級の文型や文法項目の提示順序はほぼ確立されてきているが、中上級の指導段階はまだ改良すべき点が多い。「ものと思う」や「ことと思う」を初めとして、「もの」や「こと」の使い分けを習得することは中上級の学習者にとって必須事項である。本稿では「ものと思う」や「ことと思う」の機能の違いに焦点を当てたが、「もの」と「こと」との違いが何故そのような機能上の差を招くかについての考察が十分になされたとは言いがたい。「もの」と「こと」の使い分けについて一般化することは危険であるし、本稿の目的とするところでも

ない。主として「見る」「思う」「考える」の三動詞及び各ラレル形を中心に検討してきたが、「ものとする」「こととする」等の形式をとる「する」動詞の考察にまで至ることができなかったのは残念であった。今後はそれらの検討を通して、「もの」と「こと」の本質をより明らかにしていくことを課題としたいと考えている。

〈注〉

- 1) 大量のデータを得ることができるのは長所であるが、データ数が多いだけにそのすべての実例に一つずつ当たって検討する余裕が持てないのは残念な点である。
- 2) この例からもわかるように、「見る」より「見て」の形をとることが多い。
- 3) 分布は記事によって異なりがある。たとえば、社説及び天声人語に限定するなら「と思われる」が約51%、「と見られる」が約40%、「と考えられる」が約9%である。
- 4) 以下、朝日新聞からとった用例は(朝)と記している。(朝)と記されていないものは、筆者の作例である。
- 5) ここではラレル形は「見られる」「思われる」「考えられる」を指すものとする。
- 6) 新聞記事では主として「と見られる」が使われるのに対して、小説では「と見える」の方がよく使われる。『吾輩は猫である』においても、猫の目に映った「先生」の様子を描写する際に「と見える」が頻繁に使われている。
- 7) 狭義判断の形式としては「かもしれない」「にちがいない」が挙げられている。

参 考 文 献

- 浅野 裕子 (1996) 『「と思われる」にみる日英の語用論的原則』(日本語教育88号) 日本語教育学会
尾上 圭介 (1996) 「ラレル文の認知文法的把握」(第5回CLC言語学集中講義)
小泉保 他 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店
佐藤勢紀子・仁科浩美 (1997) 『工学系学術論文にみる「と考えられる」の機能』(日本語教育93号) 日本語教育学会
砂川有里子他 (1998) 『日本語文型辞典』 くろしお出版
寺村 秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』 くろしお出版
寺村 秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
坪根由香里 (1994) 『「ものだ」に関する一考察』(日本語教育84号) 日本語教育学会
原田登美・小谷博泰 (1991) 『日本語「もの」と「こと」』(甲南大学紀要—文学編84)
森山 卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティー』 くろしお出版
森山 卓郎 (1992) 『文末思考動詞「思う」をめぐって』(日本語学 Vol. 11) 明治書院

例 文 出 典

- 朝日新聞社『朝日新聞—天声人語・社説1985-1991』 日外アソシエーツ
朝日新聞社『朝日新聞 Digital News Archives For Library』 1985-1998
夏目 漱石『吾輩は猫である』 新潮文庫
石川 達三『青春の蹉跎』 新潮文庫
三浦 哲郎『忍ぶ川』 新潮文庫